



発行所: 東京都豊島区南池袋
一丁目十三番十六号
日蓮正宗法道院法華講
03 (3984) 2650

http://www.hodoin.net

皆さんが日蓮正宗を離れてから、はや、十年がたちました。世間では、創価学会をカルト集団だと噂し、皆さんは自由な意志で考えることを停止しているのではないかと懸念しています。けれども、皆さんは、盲目的な人びとではなく、自らの思考によって意志決定ができる方々であると私たちは信じています。しかし、皆さんには現在の創価学会のあり方を考えるについての資料があまりにも少ないのではないのでしょうか。そこで、今回は、過去の池田名誉会長の著書の中から一部を抜粋し、コメントを加えてみました。皆さんの信仰を考える上で、良き資料となれば幸いです。

正しい信仰について考える資料集

現代においては、いかなる理由があれ、御本仏日蓮大聖人の「遣使還告」であられる血脈付法の御法主日顕上人猥下を非難することは、これらの徒（正信念）と同じであるといわなければならない。批判する者は、正法正義の日蓮正宗に対する異流であり、反逆者であるからである。（『広布と人生を語る』第一巻二百三十ページ）

まことに、まっとうな発言です。このひとことで、現在の池田大作並びに創価学会が正法正義の日蓮正宗に対する異流義であり、反逆者であることがよく解ります。基本的なことですが、一生成仏の要諦は、生涯、正しい日蓮正宗の信仰を持ち続けることである。このいうまでもありません。そういう意味では、このような指導をした者も、また、指導を受けた者も、そのことをすっかり忘れ去っているようですが、そのことが残念でなりません。

日蓮正宗の僧俗であるならば、絶対に御法主上人猥下に随順すべきである。それに反して、随順せず、いな、弓を引く行為をする僧や俗は、もはや日蓮正宗とはいえない。私どもは無数の讒言や画策を受けながらも、一貫して総本山を外護したてまつり、御法主上人猥下に随順してまいった。これが真実の信心であるからだ。

その通りです。日蓮正宗の僧俗であるならば、絶対に御法主上人猥下に随順すべきなのです。それに反して、随順せず、いな、弓を引く行為をする僧や俗は、もはや日蓮正宗の信仰をしているとは言えないのです。さつさと日蓮正宗とも日蓮大聖人の仏法とも無縁であることを世間に宣言し、池田教なり、創価宗なりの看板を掲げればいいのです。

私たちが法華講は、無数の讒言や画策を受けながらも、一貫して総本山を外護したてまつり、御法主上人猥下に随順してきました。これが真実の信心であるからです。

それを、増上慢と権威とエゴと野望のために踏みこじつけていく池田大作、並びに、それにしがう創価学会と離脱僧は、全く信心の二字のなき徒輩であり、もはやそれは、日蓮大聖人の「広宣流布をせよ」との御遺命に反した邪信の徒と断ずるほかないのです。

絶対なるものは、大御本尊のお力である。また、絶対なるものは御書である。そして、仏法の根本を

御指南されるのは、あくまでも御法主上人猥下である。御法主上人猥下の御指南にしたがわれないものは、もはや日蓮正宗の僧でもなく、俗でもない。（『広布と人生を語る』第三巻五十三ページ）

絶対なるものは、大御本尊のお力なのです。ところが、池田大作は、平成五年九月七日の本部幹部会で、「本門戒壇、板御本尊、何だ。寛尊は『信心の中にしか本尊はない』と。ただの物です。」と戒壇の大御本尊様をただの物だと発言しているのです。ですから、池田大作のような戒壇の大御本尊様を軽んじる輩に、日蓮大聖人様の仏法が解るわけがないのです。そして、御書に述べられた仏法の根本を御指南されるのは、あくまでも御法主上人猥下であられます。御法主上人の御指南にしたがわれないものは、もはや日蓮正宗の僧でもなく、俗でもないのです。ですから日興上人は『日興遺誠置文』に、「当門流に於いては御抄を心肝に染め極理を師伝して若し間（いとま）あらば台家を聞くべき事」と仰せになっておられるのです。

御法主上人に反逆する池田大作、並びに創価学会は、愚かにも自分自身で墮地獄の所行を積み重ねているのです。

この富士の清流は第二祖日興上人、第三祖日目上人、そして現六十七世御法主上人猥下までの御歴代上人方によって厳然と護持されてきた。そこに貫かれてきたのは「謗法嚴戒」である。他宗教にはまったくみられないものだ。（『広布と人生を語る』第三巻九十七ページ）

この富士の清流は第二祖日興上人、第三祖日目上人、そして現六十七世御法主上人猥下までの御歴代上人方によって厳然と護持されてきました。そこに貫かれてきたのは「謗法嚴戒」です。ところが、創

創価学会の首を斬るへ (1)

価学会は団体破門に処せられた途端、秋谷会長の発言に見られる如く、『謗法扱い』については、あくまで原則通り、本人の処分であることに変わりはありませんが、御本尊を安置する絶対的前提条件ではありません」（聖教新聞 平成九年二月十一日）というように、謗法容認体質に変質していきました。

歴史的に見れば、大聖人門下においても、日興上人に反逆して異流義を立てた民部日向の謗法容認体質が思い出されます。要するに、正法正義に反逆し、異流義を立てていく者は、自らが謗法となり、他の謗法も容認していく者なんでしょう。

その反対に、戒壇の大御本尊様を唯一無二と信じ、唯授一人の血脈付法の御法主上人に随順し、真の広宣流布を目指す僧俗は、『謗法厳戒』という大聖人の尊い御金言をあくまで守り通しています。このことは創価学会や日蓮宗他派、あるいは他宗教には全くみられないものです。

時は移り変わり、血脈付法の御法主上人に對したてまつり邪心をいだく僧俗、また、広布に不惜身命で戦う在家の私どもに對する増長の姿——なんとあさはかであり、なんと信心なく、なんと忘恩の、哀れな人間であらうか。（『広布と人生を語る』第三卷二百七十三ページ）

時は移り変わり、血脈付法の御法主上人に對したてまつり邪心をいだく僧俗、また、広布に不惜身命で戦う法華講衆に對する増長の姿——なんとあさはかであり、なんと信心なく、なんと忘恩の、哀れな人間であらうか。

戒壇の大御本尊様を唯一無二と信じ、御法主上人に随順する信心によって数多くの功德をいただきながら、その恩を忘れ、戒壇の大御本尊様を軽んじ、血脈付法の御法主上人を誹謗中傷するという、破仏法の人たちの不知恩を大聖人様は決してお許しにはならないでしょう。池田大作並びにそれに従う人たちは、仏罰の恐ろしさを知らなくてはなりません。

必ずや、行き詰まりに満ちた人生を歩むこと

になるのは疑う余地がありません。
「世に四恩あり、これを知るを人倫となづけ、知らざるを畜生とす。」『聖愚問答抄』

いま、日蓮正宗御宗門においても、仏法の師であられる御法主上人猊下に師敵対する僧俗が出たことは、まことに悲しむべきことである。これは恐ろしき謗法であり、真の日蓮大聖人の

仏法を信解していない証左なのである。血脈付法の御法主上人を離れて、正宗の仏法はあり得ないのである。（『広布と人生を語る』第三卷二百九十四ページ）

今、日蓮正宗御宗門においても、仏法の師であられる御法主上人猊下に師敵対する僧俗が出たことは、まことに悲しむべきことです。これは恐ろしき謗法であり、真の日蓮大聖人の仏法を信解していない証左なのである。血脈付法の御法主上人を離れて、正宗の仏法はあり得ないのです。

これは、日蓮正宗の信仰の基本であり、根本、肝要なのです。ところが、初心者でも知っていなくてはならないこの基本をないがしろにしようにしているのが、ご存じの池田大作なのです。

その根本道場が、一閻浮提總与の本門戒壇の大御本尊まします多宝富士大日蓮華山大石寺であり、その御座主が御法主日蓮上人猊下である。この日蓮正宗信徒として、御法主日蓮上人猊下の御説法を拝しつ、永遠にわたる人類平和のために、正法を基調として、個人の幸福と世界の平和を結ぶ文化、平和の基盤を営々と築いていくところに創価学会の使命がある。（『広布と人生を語る』第一卷百四十六ページ）

日蓮正宗の信仰の根本道場が、一閻浮提總与の本門戒壇の大御本尊まします多宝富士大日蓮華山大石寺であり、その御座主が御法主日蓮上人猊下であります。この日蓮正宗信徒として、御法主日蓮上人猊下の御説法を拝しつ、永遠にわたる人類平和と個人の幸福のために、広宣

流布を目指しているのが、法華講なのです。法華講は、異体同心、僧俗一致して、どのような困難に遭遇しようとも、地涌の菩薩の自覚のもと、大聖人様御遺命の広宣流布を目指して、新たな歴史を切り開いていくことでしょう。

諺にも「君子豹変す」とあります。君子というものは、誤りだと解れば、豹のように身を翻して、以前の誤りを敢然と捨て、正しい方向に向かうものだそうです。

どうか、学会員の皆さんにおかれましては、大謗法と化した池田創価学会を豹の如くに脱会し、正しい信仰に還っていただくではありませんか。

この代々の御法主上人猊下に御奉公していく信心が、創価学会の根本精神なのである。（『広布と人生を語る』第三卷百五十一ページ）

この根本精神を捨て去ったときに、創価学会の謗法化が始まったのです。したがって、何も沈没した船にいつまでも残っている必要も義務もないのです。

取り急ぎ、沈没船から脱出し、正法正義の正しい大船に移ればいいのです。また、それが正しい信心の在り方なのです。創価学会員の皆さんには、そのことを理解してもらいたいと念願しています。

遣使還告であられる御法主上人猊下は、日蓮大聖人様であります。（『会長講演集』十卷四十三ページ）

信徒の立場からは、歴代の御法主上人の内証を大聖人様と拝することが、信仰上、大切ですが、そこには三宝における内証と外用等の甚深の立て分け、筋道があります。

ゆえに、法華講においても、代々の御法主上人の内証を拝し、その指導を通して大聖人様を拝し奉るところの本宗の師弟相對の義の上から、特に御法主上人の内証を尊崇すべき発言があります。しかし、それと学会が論難する「法

主即大聖人」や「法主本仏」などは、筋道も意義も異なるのであり、そのようなことは全く宗門には存在していません。

どうか、創価学会員の皆さんにおかれましては、自分自身の幸せ、家族の幸せを実現する道は、正しい信仰による以外にはないのだということをよくよく考えていただきたいと思えます。

戒壇の大御本尊様を離れ、幸せになつたためではないのです。まして、『二尊本尊』を作り、御法主上人誹謗を繰り返している創価学会に、幸せなどはあり得ません。皆さんの勇氣ある行動を心より念願し、資料の提供をさせていただきます。

